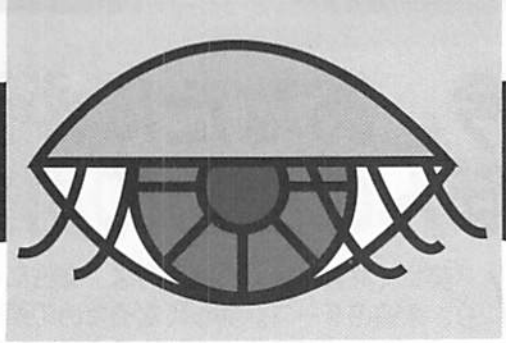
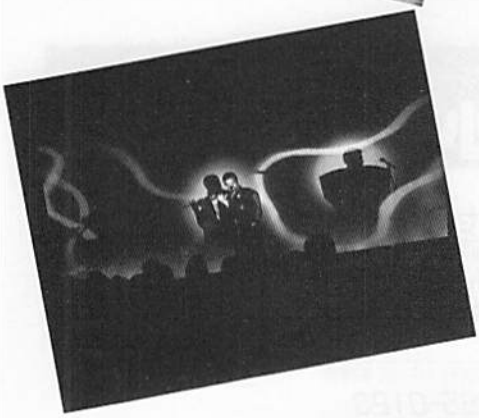


河原町通りにポッカリ浮かび上がった平安建都1200年広場。

4月29日のグランドオープンにさきがけ、オープニングセレモニー開催。



記念すべき平安建都1200年もいよいよ中盤に差しかかり、京都各地でさまざまなイベントが行なわれている。しかし、どこで何が行なわれているのかを知らせられる総合案内所の機能をはたす施設がなかったのだ。そこでインフォメーションセンターとコミュニケーションセンターとして誕生したのが『平安建都1200年広場』である。

広場は京都に訪れた人を、京の町衆が心をこめて京文化をふるまうことがねらい。会場構成は、伝統工芸物産市や量り売りなど、昔ながらの京都の商売を実演する『おこしやす小路』、きものレンタルや遊技場を実施する『ふるまい小路』、京の味やお茶が楽しめる『あじわい小路』、そして京のイベントや観光案内とPRを行なう『おもてなし小路』となっている。この『おもてなし小路』ではJR東海の「そうだ、京都いこう」キャンペーンのCFを上演し、京都の観光総合案内を行なう。エントランスにふさわしいブースだ。そして中央のステージ『ふるまい広場』では、伝統芸能やフリーマーケットなどのイベントをつぎつぎと展開する予定である。河原町通りに面したわずか580坪の敷地に、京都の伝統が凝縮している。

さて、4月29日の広場オープンに先がけ、28日、午後7時より関係者を招いてオープニングセレモニーが始まった。セレモニーには三笠宮寛仁親王同妃殿下がご来場された。乾杯の音頭をとった京都若衆会会長の北村陽次郎さんは、驚くほどの短期間の間にこの広場をつくりあげた人物である。北村さんが語るように、若者のバイタリティと、指導者たちの理解が、想像以上の立派な広場を完成させたといっても過言ではない。この日、セレモニーに参加した誰もが、新しい京都名所の誕生を心から祝った。

文／大塚祐希

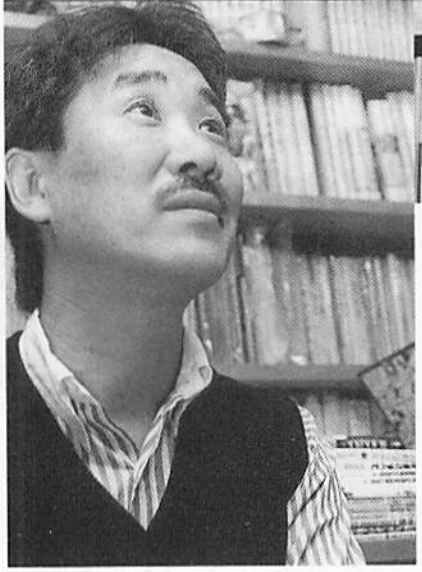
FAME Report

京都ノゾキ見トピックス

記念館の誕生と、もうひとつの手塚ワールドの消失。

9年間の活動に終止符を打つ、手塚治虫ファンクラブ・京都。

「メトロポリス」「ロストワールド」「来るべき世界」はSFを代表する三部作。
「新宝島」は手塚治虫のデビュー作。



ライター／亀井孝文　写真／大田メグミ

4月25日、兵庫県宝塚市に手塚治虫記念館がオープンした。漫画家・故手塚治虫氏の功績を称え、作品の初版本や原稿などを展示する"手塚ワールド"である。この記念館に「リボンの騎士」「ロック冒険記」などの貴重な初版本、単行本の数々を寄贈した人物が京都に存在する。手塚治虫ファンクラブ・京都代表の石川さんである。同クラブは、手塚氏の初期作品の復刻を行なってきたが、奇しくも記念館が誕生した今年、19年間の活動の幕を閉じることになった。石川さんが手塚氏の作品に目覚めたのは小学校4年生のとき。SF科学冒険漫画「0（ゼロ）マン」であった。以後、急激に手塚治虫の世界に没頭し、20歳のとき、当時入会していた唯一東京にあるファンクラブからの会報が途絶えたのを機に奮起。昭和51年11月、友人とふたりで独自のファンクラブを結成した。その最大の目的は、手塚作品のオリジナルの復刻と会報発行にあった。同時に、石川さんは「人が持っていない本を集めるのが目的」と古本店を開業し徹底して手塚作品の収集に専心した。現在、書斎には本人も正確な数を把握できないほどの手塚作品が並ぶ。

ファンクラブの解散は、会報誌の発行による資金難、「手塚氏の作品に黒人差別の部分がある」とのとある団体からの圧力、800名にもおよぶ会員への事務処理の限界など複数の理由によるものである。しかし、その最たる原因は、もうこの世に手塚治虫が存在しないこと。「いまだに手塚さんが死んだとは思えない」親しく付き合ってきた手塚氏への思いと、ファンクラブ解散の現実の狭間で苦悩する石川さんの心中を誰も知る由がない。手塚氏も何度か訪れた書斎には「愛蔵書」と名付けられた夥しい数の手塚作品が眠る。